

● +  
2011-2012  
JPN → FIN  
Contemporary Dance  
Residence Exchange and  
Co-production Program

2011-2012 日本-フィンランド  
ダンス レジデンス エクスチェンジ 共同製作プログラム

「KITE」



## 目次

---

■ JCDN 国際アーティスト・イン・レジデンス 第1回目を終えて

■ 目的・概要

■ スケジュール

■ 参加アーティストによるプロジェクト参加感想文

■ 「KITE」公演情報

■ Artist Profile

■ 「KITE」制作日誌

■ 観客アンケート

## JCDN 国際アーティスト・イン・レジデンス 第1回目を終えて

水野立子/アーティスティック・ディレクター  
NPO 法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク(JCDN)

日本の全国各地に、海外で活躍するダンス・アーティストが滞在し、ダンス作品制作を行う機会をつくっていくプロジェクト“国際アーティスト・イン・レジデンス”の初年度を終えた。今回は、日本とフィンランドの交換プログラムを日本:JCDN とフィンランド:ヘルシンキにある ZODIAK との共同製作となった。

日本とフィンランドの振付家がそれぞれ相手の国に滞在し、ダンサー・照明デザイナー・音楽家と共に作品制作を行う本プロジェクト—日本人は坂本公成さん、フィンランド人はエルヴィ・シレンさんに決定したのは2010年秋。それから足かけ2年、丁寧なプロセスを経て今回の作品制作期間と公演に辿り着いた。

まず、坂本とシレン、それぞれの振付作品を紹介する機会を相手国で作り、共同制作するダンサーを決めるオーディションを行う。その後、互いの国に約1ヶ月間滞在し新作を制作し、世界初演として発表するという、オーガナイズする側も参加するアーティストにとっても、長期に渡るものとなった。

JCDN が行ってきた過去の国際プロジェクトではアーティスト同士を紹介したり、組み合わせをコーディネートしたケースもあった。その場合、作品の責任所在が明確でなくなり、コラボレーションの難しさ、弱さを露呈させてしまったことも否めない。日本の振付家の活動は近年、国内か国外かという隔たりがなくなり、その活動の幅は世界に広がりつつある。また、インターネット上で容易に多くの情報が入手できる現在では、国際的な視野を持つ作品制作の可能性が広がっていることは事実である。しかし、実際に、アーティスト自らが作品制作を行いたいと思える海外アーティストと出会い、それを実現するための環境や経済を整えることが可能かといえば、容易なことではないだろう。このプロジェクトが将来的には、アーティスト自らが国際間の作品制作の可能性を広げられるような環境に日本がなっていくこと、国際的な創造活動の土台づくりの役割を担うことができれば、という思いを含んでいる。その環境が豊かになれば、作品自体のレベルも向上していくだろう。

今回の作品制作において、作品の作者である振付家が、総合ディレクションを担うという方針で、制作するメンバーを選出していった。つまりは、純粋なコラボレーションというよりも、振付家が主体的な作者となることで、オーディションや希望でメンバーが決定していく。

フィンランド人振付家・エルヴィ・シレンさんは64歳。振付家としてのキャリアを長く持つ。ヘルシンキのシアター・アカデミーで長年に渡りダンスの教鞭をとってきている教育者でもある。30代半ば、それまで突っ走ってきたシビアなダンス活動に疲れ、ダンスが苦痛に感じるようになってしまった。これを転機とし、もっと自由にリラックスしながらダンスと向き合っていきたいと思い、それまでのダンス・スタイルを一変させたという経歴を持つ。

この話から日本での作品制作期間のシレンの振付法をみつめると、なるほどな、と思うことがあった。シレンはダンサー自身によって、自らの身体と向き合い丹念にダンスを紡ぐ作業を繰り返させる。これらを繰り返し繰り返し、気の遠くなるようなリハーサルを積み重ねる。決まった「振り」をシレンがダンサーに振付けることはしない。答えは常にダンサー自身の中にある、とでもいうように、その徹底ぶりは一貫していた。フィンランドを訪れたとき、そこで出会ったフィンランド人ダンサーが口々に、「エルヴィの振付は、とても素晴らしい。自分自身が生まれ変わるような振付だ。」と言っていたように、今回参加した日本人ダンサーも多くのことを得たようだ。言わば、ダンスの持つとてもプリミティヴな方法で、アプローチしていく振付方法。奇をてらうことなく、作品の見栄えを重視する演出もなく、とても素朴なダンスが現れていたように思う。

1ヶ月間このようなリハーサルを終え「KITE」という作品をつくり京都公演で上演した。観客の感想は、はっきりと2つに分かれた。「上演中アクセスできる場所が見出せなかった、作品としてよくわからない。」という意見か、「ダンサーの動きに美しさを感じた。真摯なダンスと自然界の現象をみているような作品の世界観を感じる事ができた。」という相反する意見だった。

シレン自らがオーディションから選出し、自分が惹かれたダンサーを選んだとしても、異国の文化圏で初めて会う外国人との振付作品。普段自分がよく知るフィンランド人ダンサーと制作するほうがよほどやりやすいこともあるだろう。しかし、あえて、日本で初めて会う日本人との作品制作を行うこと。その逆として、坂本公成がフィンランドで初めて会うフィンランド人ダンサーと作品制作を行うということ、そのことから得られるものは、何だろうか？

私見を述べるとすれば、振付家にとっては、普段の環境の中でやりやすい制作過程からは、気がつかない自分自身の方法論を見直すこと、そして、それが後ろ盾のないところや共通認識のない見知らぬ相手に、通用するものなのかどうか、果たして最後に何が残るものなのか、自分の方法論が通用するのだろうか？という事実をみつめ、足りないことをつくろうとすること、その結果を知ることなのではないだろうか。

ダンサーにとっては、キャリアを積むうちに知らず知らずに持たされて来た、あるいは、築き上げてきたメソッドや習慣から離れ、自分にはないもの、あるいは本来は持っているけれど、使われていない身体的能力や魅力を身につけようとする機会を得ること、また、未知なる自分の長所をシレンによって引き出されること、ではなかっただろうか。

そして、最終的に“作品”として観客に鑑賞してもらった上で、どのような影響をあたえるものがつくれたのだろうか、ということを受けとめること。これは、国際アーティスト・イン・レジデンスだからこそ挑戦できることだ。今回制作した作品「KITE」は、幸いにも来年度6月フィンランドで9月に日本のフェスティバルで上演の機会がある。作品としての強度をつける次のステージに進んでいきたいと思う。

本プロジェクトにアーティストが集中して参加することができ、実現できる環境を与えていただき、サポートしていただいた全ての助成団体、共催者、関係者に感謝申し上げます。

2012年3月20日

## project の目的

### JCDN 国際ダンス・イン・レジデンス・エクスチェンジ・プロジェクト

---

JCDN の持つネットワークを活かし、日本各地のダンスの拠点となる劇場・オーガニゼーション等と連携を結び、海外から招へいするダンスアーティストの作品創作を可能にするダンス・イン・レジデンスの拠点を創りだしていくこと。

JCDN が取り組んできた海外とのダンスプロジェクトなどを通じて構築してきたダンスネットワークを活かし、海外の芸術団体組織とパートナーを組み、その国のダンスアーティストを招へいし、わが国にてレジデンスを行い、日本人ダンスアーティストとの共同作品創作を行っていくこと。

同時に日本人ダンスアーティストが相手国にレジデンスして、その国のダンスアーティストと作品創作を行う。双方のレジデンス・エクスチェンジ・プロジェクトとして実施することで、国際的に活動するダンスアーティストの活動支援、作品創作のサポートを行っていくこと。

## ■ program 概要

### “日本-フィンランド ダンス レジデンス エクスチェンジ 共同製作 プログラム”

---

日本：JCDN とフィンランド：ZODIAK が、共同企画・製作を行うプログラム。  
互いの国のダンス環境が、国際的な活動の可能性を広げるため、日本とフィンランド両国での作品制作・公演ツアーを実現させていく。

フィンランド人のダンスアーティスト エルヴィ・シレンが日本に、日本人ダンスアーティスト 坂本公成がフィンランドにそれぞれ滞在し、その国のアーティストと作品制作を実施。

初めに、本プログラムに参加する振付家が、どのような作品を創作しているかを紹介するために、エルヴィ・シレンは日本：鳥の演劇祭(2011年10月1日2日)で、坂本公成はフィンランド：フルムーン・ダンス・フェスティバル(2011年7月)で、自身の振付作品を上演し紹介した。その際、新作品を共同創作する相手国のダンスアーティストを選出する為に、ワークショップ形式のオーディションを行った。

選出したダンスアーティストとの作品創作を坂本は2012年3-4月ヘルシンキで行い、その後、ヘルシンキで上演する。エルヴィは2012年1/25-2/24まで東京で作品制作を行い、その後3/2,3 京都公演で上演した。翌年度には、両作品を、フィンランド・日本の両国で上演する。

## ■ スケジュール

---

### 2010年

#### Nov @ 日本 / フィンランド

日本: JCDN とフィンランド: ZODIAK が、  
日本人振付家: 坂本公成 / フィンランド人振付家: エルヴィ・シレンを選出。

### 2011年

#### Jul 24 - 29 @ プハヤヴィ / フィンランド

坂本公成が、自身の振付作品「怪物」「きざはし/Edge」を  
フィンランドのフルムーン・ダンス・フェスティバルで上演。  
また、5日間のワークショップ+オーディションを行い、  
坂本公成の作品制作に参加する5名のフィンランド人ダンサーを選出した。

#### Sep 22 - Oct 2 @ 東京・鳥取 / 日本

エルヴィ・シレンが、東京・森下スタジオにて4日間のワークショップ+オーディションを行い、  
エルヴィ・シレンの作品制作に参加する日本人ダンサー/パフォーマーを選出した。  
エルヴィ自身の振付作品「AERIAL FERRYMEN」「STREET」を鳥の演劇祭4で上演。

### 2012年

#### Jan 25 - Mar 1 @ 東京 / 日本

エルヴィ・シレンとアーケ・オッツサラが来日。  
選出された5名の日本人ダンサー/パフォーマーと照明デザイナー藤本隆行とで、  
新作品「KITE」の制作を東京・森下スタジオで行う。

#### Feb 15 @ 横浜 / 日本

「KITE」作品制作期間中の途中経過 PRESENTATION & SHOWING を行う。  
17:30 ~ 会場: BankART Studio NYK(横浜)

#### Mar 2, 3 @ 京都 / 日本

京都芸術センターで「KITE」を上演する。

**Mar 5 - Apr 10 @ ヘルシンキ / フィンランド**

坂本公成が、選出された5名のフィンランド人ダンサーと照明デザイナー藤本隆行と  
新作品「灰が降る」の制作を ZODIAK で行う。

**Apr 11 - 18 @ ヘルシンキ / フィンランド**

ZODIAK の SPRING シーズン・プログラムとして坂本公成新作品「灰が降る」を上演する。

坂本公成振付作品

**「灰が降る / ~Ash is falling」**

振付: Kosei Sakamoto

出演: Johanna Ikola / Meeri Altmets / Kaisa Niemi / Jarkko Lehmus  
Ville Oinonen

照明デザイン: Takayuki Fujimoto

この作品は、1900年生まれの日本の詩人三好達治による詩『灰が降る』をサブテキストに、  
世紀を隔ててなお人類を翻弄し続ける「核」の問題を入り口に、文明の孕む問題、  
その中で身体とダンスの未来を考察し、ダンス作品化する。

→ 公演情報詳細は <http://www.zodiak.fi/fi/>

**Jun 19, 20 @ クーピオ / フィンランド**

Kuopio Dance Festival 招聘公演 エルヴィ・シレン振付作品「KITE」上演。



**Jul @ プハヤヴィ / フィンランド**

Full Moon Dance Festival 招聘公演 坂本公成振付作品「灰が降る」上演。



**Sep @ 鳥取 / 日本**

鳥の演劇祭5で「KITE」「灰が降る」を上演。



## ■ 参加アーティストによるプロジェクト参加感想文

---

### ロエルヴィ・シレン（振付家）

振付家として、体の気をひらくことに焦点を当て、ある種の動きのテーマを展開し、インテンシブな制作時間にダンサーと創造を始める。動きのテーマは私が選択し、ダンサーは自分の身体の中を探るワークをする。私はダンサーに動きの理解を促し、その理解から創作の内面的な物語が始まる。振付家とは、思想の創造者、そして創作を展開する者、ということである。振付家が作品の中からどのような世界が見えてくるのかを選択する。振りを創造する時に、重要な興味の中心は、ダンサー及びダンサーの制作である。基盤は動きとそれを詳細に調和すること、すなわち人間に対する全人的な接近法である。

つまりは、私がダンサーと作品をつくる時に一番、興味を惹かれるのは、ダンサーが生み出す動きそのものとなる。特に心がけるのは、ダンサーから無理のない動きを引き出すこと。自然な動きを見つけ、リラックスした状態をつくることにフォーカスする。この動きを丹念に積み重ねていくことで、ダンサーの身体の中から様々な感覚が呼び起こされ、最終的にそれぞれのダンスから“人生”そのものを感じることができよう。また、いかにその創造に人間性が現れるかは、私の好奇心をそそる。最近、人生への勇気、自由、遊び心、軽さ、浮力に興味がある。これらを今回の作品「KITE」で目指す要素とした。

この作品では、照明デザインの藤本隆行と音響デザインのアーケ・オッツサラと共同制作を行った。二人が自分自身の世界と想像をどのようにこの創作に持ち込むのか、に興味を持ち楽しみであった。実際に、彼らはとても素晴らしいアイデアを持ち込んでくれた。

今回、一緒にワークしたこの5名のダンサーを選んだ理由は、性別、年齢、バックグラウンドが全く異なるという事。そして一方で共通している事としては、彼らが皆、自分の身体の内側に集中することができ、自分自身のオリジナルな動きをつくることができるということ、この2つの点が重要なポイントであった。そして、実際にリハーサルの期間中、それぞれ全員が自分自身の動きを発展させることができ、実りがあったと感じている。ダンサーそれぞれは強い芸術感覚をもっていた。日本人ダンサーに初めて振付をしたが、とても集中力があり、粘り強いと思った。私がもう十分だと感じて、彼らは必ずもう一度やりたい、と言う。これは彼らがどれ程この作品に捧げていて、常にベストを尽くそうとしているのかということを物語っていた。

アーティスト的な視点でいえば、フィンランドと日本の文化の共通点は、余計なものを削ぎ落とし、そこに本質を見出そうとする点があるのではないかと、思う。常にフィンランドの芸術家は日本からインスピレーションを受けてきたことがあり、作品の中でその2つの世界を兼ね備えることを試みた。約40日間の滞在の中での作品制作と公演だったが、次の6月の再演する機会までにさらに作品として、共感を生むものをつくりたいと、今から構想を練っている。今回このような機会を得られたことに、関係各者の皆様に心より感謝申し上げたい。



□ 藤本隆行（照明デザイン） Ervi Sirén 振付作品「KITE」

一般に「彫刻／Sculpture」と呼ばれる美術作品の制作方法には、硬い素材を彫り刻む技法「彫刻／カーヴィング(carving)」と、可塑性素材を盛りつけて形を作る技法「彫塑／モデリング(modeling)」がある。

ダンスは、身体という質量を扱う3次元の空間構成の上に、動作という時間軸が加わるので、彫刻と同列に扱うことはできないが、その動作というエレメントがあるが故に、振り付けは「彫塑／モデリング」に近い作業だと思っていた。まず、完成像が何らかのイメージとしてあり、そこに向けて様々なパーツを作り、それぞれを組み合わせて形にしていく。

例えば僕の場合は、自分は身体表現の専門家ではないと思っているので、自分で作品をディレクションする時には、パフォーマーの身体が置かれる状況をデザインしていく。時間経過と共に身体への負荷が変わる、こなさなければいけないタスクが変化する条件設定を提示して、それをもとに、それぞれの条件下での問題を解決する動きを作ってもらう。

ところが、今回この Ervi Sirén 振り付け作品「KITE」の制作に参加してもっとも刺激的だったのは、彼女／Ervi の振り付けが「彫刻／カーヴィング」に近い作業だったという事だ。もちろん身体は、石や木のように個人によってまったく違う素材というわけではないが、それでもたとえ関節の数は同じでも、動作のバリエーションは数知れない。それはおそらく個人によって、「時間」や「空間」を把握するパラメーターが、僕らが普段実感しているより数多くある為だと思うが、Ervi さんの振り付け作業は(それをとりあえず振り付けと呼ぶとして)、そのパラメーターを整理して基本のいくつかを単純化し、その動きを各自に自覚させる事につきる。つまり、様々な材料に共通の負荷をかけて、その特性を見いだす／自覚させる。その事によって、改めて明らかになった各人のありようが、Ervi さんの振り付けとして提示される。

僕にとって「KITE」で行われていた作業は、そのようなものだと思えし、その中に参加できた事は、静かな毎日であったにもかかわらず、とても刺激的な体験でした。

## 出演ダンサー・パフォーマー

□岩淵多喜子 「KITE」に参加して

このプロジェクトに参加した動機は、昨年9月に行われたワークショップオーディションを受け、エルヴィ・シレンさんの体を開発していく方法に触れ、もう少し長いスパンでこれを継続して受けてみたい、またこのメソッドがどのように作品創りに反映していくのか、ということを経験してみたいと思ったことが一番の理由です。

実際に約 5 週間、このプロジェクトに参加しての感想は、一言で言えば、色々な意味で、とても贅沢な時間だったということです。

まず、環境について、創作期間中の約1か月、決まったスタジオで1日中リハーサルができ、創作過程の初期から音楽、照明といったスタッフが作業に参加し、オンタイムで創作に関われる状態、経済的な部分のサポートも主催者から充分にあった為、期間中、他の仕事に忙殺されることなく集中して作業に取り組める環境が整っていました。仕事として普通に考えれば当たり前のことかもしれないですが、日本のコンテンポラリーダンスの創作環境の現状を考えた場合、なかなかこういった環境で創作活動を行うことは難しく、今回のプロジェクトでは創作を行うにあたっての理想的な環境が整っていたと思います。

実際のクリエイションの内容については、エルヴィさんの取った方法は私にとってとても興味深く、刺激的なものでした。まずウォーミングアップからなる一連のエクササイズが彼女の長年のダンサー、教育者としての経験から編み出された、シンプルでありながら体の機能の本質を熟知した、あらゆる表現者に適応できるであろうと思われる根源的な方法でした。シンプルであるがためにそれを習得することは大変難しいことでしたが、毎日繰り返すうちに、体への意識が変わってくる感覚を自覚できるようになり、体に深く向かい合う時間を持つことができました。期間中、エルヴィさんは常に忍耐強く、また体の本質を見抜く的確な眼を持ち、私たち一人一人に常に適格なアドバイスを与えてくれました。作業の中で他の人との関係性を意識する練習やディスカッションというのは特に行いませんでしたが、このシンプルなエクササイズを毎日同じ空間で繰り返し、互いの動きを観察し、エルヴィさんの各自に与えられるアドバイスを聞くことを繰り返していくうちに、自然に互いのことを尊重し、グループとしての空気感を共有できるようになっていったように思います。

またエルヴィさんのアプローチで特に新鮮だったのは、エクササイズ的な部分と作品創作が完全に繋がっているところでした。この作品は KAIT(凧)というタイトルでしたが、創作過程の中で作品のコンセプト等についてグループ内で話したりすることはなく、ただひたすら基本的な動きのエクササイズを繰り返す作業でしたが、今考えてみると、体の内側を感じて、ただそこに存在するあり方を見つける、ということ自体がこの作品のコンセプトで、エルヴィさんの作品のイメージを具現化するための具体的な方法だったのだと感じています。つまり作品のコンセプトは体のあり方そのものだったということだったということです。彼女はこの作業についてきてくれたダンサーが brave (勇気があった)と言っていましたが、この手法を選んだ彼女自体が brave だったのだと感じています。外から見えるコンセプト、ドラマトウルクが重視される風潮の中で、ただ体に向かい合うダンサー一達をその場に置くこと自体が自分の作品です、ということをも信じて通すことは、コンセプト

重視の現在のコンテンポラリーダンス界の中では稀有なことであると思うし、勇気、決断のいることだと思います。特に自分の良く知らない外国人のダンサーに対してこのアプローチを取ることには。。KITE の作業を通して、ダンスって一体何だったか、ということについて立ち止まり、再考できたことは、個人的にはとても大きな収穫でした。それを許してくれたのは、やはりそこに集中できるための環境があったからだと思います。

この作品は今後フィンランド、鳥取で再演できる機会があるので、創作のプロセスで得たことをもう一度租借し、創作プロセスで得た得難い経験を、観ている人にも伝えることができる場所にまで高めていきたいと思っています。

エルヴィさんに言われたことで印象に残っているのが、「あなたたちが身に付けた体への感覚は誰も奪うことができない。目に見えるもの、物質的なものは環境によってなくなったりするかもしれないけど、身に付けたことはなくなるしない。自分のものとして将来ずっと持ち続けることができる」という言葉でした。エルヴィさんはとても良い振付家であり、教育者です。私は現在、振付や演出、教育をする立場でいることが多く、自分がアウトプットをする立場が殆どなのですが、今回 10 年以上ぶりにダンサーとして他の人の作品に参加させて頂き、誰かに学べる、ということが本当に新鮮で、貴重な経験でした。まだまだ知らないことがあるし、学びたい、学ばないといけないことがたくさんある、と感じることが出来たこと、それは、今後の自分のダンスの活動の原動力につながっていくと思います。貴重な経験をどうもありがとうございました。

---

## □立石裕美

半年ほど海外で生活した経験から異文化に興味を持っており、クリエイションを行う中で自分自身の心と身体がどのように変容するのか、同時に日本人として何を持っているのか何ができるのか考え模索することに興味がありました。そしてダンサーとして活躍したエルヴィシレンさんが独自の手法で作品を創るという振付法やアプローチの仕方にも興味を持っていました。自分の活動を模索していた時期の募集でしたので新たな何かの可能性を見つけられればと思い応募しました。

様々な事が新鮮でしたが中でも彼女のエクササイズがとても素晴らしい内容でした。ゆっくりじわじわと動く作業で背骨を意識し身体の軌道や骨格に沿って新しい動きを経験しました。回数を重ねれば重ねるほど身体が敏感に感覚できるようになり、無駄な力はそぎ落とされ自然治癒力が高まるような実感を持ち、身体の新たな可能性を導きだし、発見させてくれました。クリエイションの方法もとてもユニークでした。

毎日必ず行うのはエクササイズで身体の準備体操や精神統一のような効果を持ちました。そして彼女の指示のもと手や足、太もも、関節など身体の一部を動かす作業を繰り返しました。ダンサーが自分の身体とどう向き合いどのように変化していくのか注意深く見てくれていたように思います。とても丹念に時間をかけて身体を動かしました。そしてダンサーの体調を一番に尊重し時

間にゆとりを持つ彼女の姿勢は個人を尊重し実りある生活を持つフィンランドの国民性や文化を想像しました。自分自身にとってもこの方法によって心と身体のタイムラグを感じる事がなくなり素直に身体が反応するようになりました。そして少しずつ繊細で敏感に身体が感じられるようになり新たな領域を体験しました。

作品の構成が完成するにあたって、エクササイズがそのまま作品の一部となる方法は自意識を捨てる行為でもあり、どう向き合うか考える時間が必要でした。

けれども身体の魂となる領域を提示しようとするはっきりとした彼女の軸の下、ダンスをしたい、踊りたいという単なる欲望から身体を動かすことではなく、独創的なアプローチによって既存のものに囚われず根源を探り提示する彼女の仕事は本質を貫いてとても深く意味のある事だと思い、改めて貴重な時間と出会いを頂けたことに感謝したいです。

現在既存のダンスやテクニックに囚われることなく身体と向き合う作業は、様々な方法で考案されているのが事実だと思います。しかしその作業は労力と時間が必要であり私達ダンサーにとって生活していく上でできるようで、できなかった作業であり、とても曖昧にもなっているのも現状だと思います。しかし今回のクリエイションにおいてエルヴィさんの振付法を経験し独自の方法論を確立する作業は既存のテクニックを習得したうえでのダンスよりもはるかに強い確固たる物を生み出し自信となることが実感できました。そして今回『作品とは何か?』という視点からも考えました。コンセプト作品が注目され始める中、彼女の作品はその大半を動く身体(ダンサー)に委ね紡ぎだし構成し、空間の構成はほとんど必要ともしませんでした。このゆるぎない徹底したダンス作品だからこそダンスすることから作品へ導く方法は最も意味のあるダンスの作品だと思いました。

今後の活動において既存のテクニックや振付法に頼らず確固たる軸の下、独自の方法論を考案する必要性を改めて実感しました。それは身体や空間を提示する者として最も意味のある確かな作業だと思いました。

---

## □ 玉邑浩二

今回、このプロジェクトに参加しようと思った動機として募集要項に「自分自身の身体に敏感な人」という項目があったのが大きかったです。元々、私は演劇の脚本と演出をやっており約一年ほど前から「自分自身が体感していないものを人に演出する(言葉にする)ことはできないんじゃないか?」と思いダンスをはじめました。何故、今までやってきた演劇の俳優ではなくダンサーをだったのかは、今思うと即興というダンスのジャンルに出会ったことがきっかけだったと思います。素直に自分が思うことを身体の動きとして出してみることが当時の私には新鮮でした。もちろん即興はそんな単純な考え方ではないですが、今でもその”素直に出す”ということはとても大切だと考えています。ダンスをするきっかけが即興ということもあり、なおさら募集要項が気になりました。ほとんどダンスの経験もない自分の武器も即興で培った”動きに対しての繊細さ”だけしかないなと思いました。運良くオーディションに受かったことは今でも信じられません。

英語を話せなかったこともあり、稽古がはじまると少し戸惑いました。しかし、インプロの作品をだったことや、今回のフィンランドの振付家であるエルヴィさんの考え方にとても共感するものがあり、少しずつ慣れていったと思います。身体が水の中に浮くような感覚を持ち関節を緩め、身体が動きたいように動くという方法は今までやっていた自分の気持ちを優先して動くものとは違いました。エルヴィさんの方法をやることで少しずつですが、自分の身体が何を言っているか、どんな方向にいきたいのか、がわかるようになったと思います。気持ちで動くこともひとつの素直になる方法ですが、身体に沿って動くこともまた、素直になる方法なんだと知りました。それは自分自身が当初、即興と出会ったときに感じた”素直に自分が思うことを動きとして出す”という考え方と根本的には一緒でした。

ただ、身体が動きたいように動くようにするために自分の身体と対話しなければなりませんでした。その結果、自分の内面に導かれていってしまう傾向にありました。そんな状態から表現として観客に提示することへ、いってしまえば見栄えをどうよくしていくかという考え方が入る余白があまりないように感じました。とてもシンプルなことをしているところに、見栄えをよくする色んな構成や方法論を入れてしまうと、やっていることが繊細な故に本来見せたいことが見えにくくなる気がしました。

ひとつの作品として、こういう繊細な行為を観客にどうやって提示していくかは、今後のこの方法の課題だと思います。私自身もその課題の答えはわかりません。しかしエルヴィさんの方法たくさんの人に表現が伝わる可能性を感じます。誰もが持っている身体をひとつのマテリアルとみて作品を作る方法は、個々の身体の可能性を引き出すはずで、身体というひとくりにできるマテリアルの中にある、個性や癖などは観客がスペクタクルのような壮大なものを見るのとは違う感覚を与えることができると思います。誰もが持っている身体だからこそ、見る人は入りやすいし日常に近い分、飽きやすいのかもしれませんが。しかしその単調に見えるものが、生きていくうえで切っても切れない身体と対話して作ったものならそれは、たくさんの人に何かを伝える可能性を持っているはずで、

私自身、ずっと素直に踊ることと見栄えの問題や、構成の仕方などがうまく噛み合わず苦しんできました。その苦しみは表現をする人はみんなしていると思いますし、このプロジェクトに関われたからといってその問題が解消されたわけではないですが、根底にあるものが見栄えではなく、あくまでも身体だということを再確認できた気がします。

日本人の振付家なら言葉で理解して動くということも、翻訳はありましたが私自身が英語がわからなかったこともあり、たくさんなことを自分で考え、言葉で理解するよりも身体で理解する部分が多かったようにも思います。理解できなかったことは歯がゆかったりもしましたが、新しい経験でした。今回、一緒に踊った共演者の方やスタッフの方にも出会えてよかったです。6月に京都でやった公演よりもっと強くなやかな踊りができればと思います。

---

## □ 垣尾優

現代において無駄は価値なきものとされています。僕もそう思い揺らぐときがあります。一見無駄無為な行為の価値。それを発見し、確認し、ただ芸術としてでなく、それは社会のなかでこそ価値あるのだ、また何より、それは人間の喜びのひとつなのだ、と世の中に提示する。それが現代の日本の芸術の役割の一つと思っています。

今回このプロジェクトに参加したのは、はっきりいって勤とタイミングです。しかし後で考察すると動機を裏づけるいろんな要素に気づきました。まず経験あるダンサーが募集されてたこと、フィンランドというあまりダンスの情報がない国への興味、教育者であり、長いダンス経験を持つエルビイシレンさんへの興味、遠い国遠い人との出会い。そしてこの企画自体が前述した無駄無為な行為、すべての人間に関わるその根源的な価値に対してじっくり対峙できる状況を提供してくれ、またそれをする意思がある、その事が大きな参加動機になりました。

実際一ヶ月のリハーサルでは、奇しくも、エルビイさんの身体観、ダンスへのアプローチは素直に身体に向き合う、じっくりと時間をかけるといった根源的な価値を問い直すようなものでした。ダンサーとして、一人の人間として無為な贅沢な時間であり学びでした。横浜での試演会プレゼンをはさみ今回まず京都芸術センターで、舞台での作品発表を二公演行いました。作品の善し悪しは出演者として記述しませんが、ひとつ素直な言葉としては、みんなもダンスすればいいのになあと思いました。

もちろん作品で伝わる事があり意義は大いにあります、僕は自分が踊りたいから踊っています、しかし今回素直にそう思ったのは、エルビイさんの身体観やダンスへのアプローチが人間の根源によりかかわるようなことなので、いろんな人とも共有できる気がしました。より良い人生の為に、無為の喜び、激しさ、儂さ、美しさ、有用性、それらをを真っ向から肯定するような経験、状況は特に現代の日本に生きる人間に必要な気がします。

「生きること」と、どんどん同意となっていくコンテンポラリーダンスというジャンルは何ができるのか？可能性は？企画を通してまた強く思ったのは、日本でのダンスというものに関わる、スノッ

ブ的イメージの払拭、ダンスを当たり前にする視点の再獲得、そして今日本でヨガ、登山、オーガニック、ロハス、ジョギング、ウォーキング、武道等、身体への関心が高まっていますが、ダンスはそういったものに比べはっきりした有用性が見えにくいし、科学的に分析できない、変なスノッブ的イメージもある、しかしその無為無駄を内包するがゆえ、より人間的で、軽く、重く、自分に世界に広がる、包括的な可能性を持つ、現代において意味のある手段のひとつでなのではということです。

のんきにのんびりだけでも駄目でしょうが、また、無駄だけでいいのだ芸術だけでいいのだと、それが今の価値に取って代わるだけなら意味がないですが、個人的に自分のこれからの活動においても思うのは、無為有為を超えたところに生命があって、どちらも人間の根源的な喜びとして、それを忘れないように、当たり前に向き合い、できるだけ質の高い手段で提示しようということです。具体的には、これからワークショップクラスなどを開く機会があればエルビィさんがしてたような、まず向き合い、身体をじっくりじっくり確認するやり方をしたいと思います、前述した通り、今、日本で、いわゆるダンス未経験者にも、職業年齢問わず、有用で必要と思うからです。即興を軸とした自由を一瞬、垣間見る事を目的としたワークショップをしたいと思っています。

また言葉、文化が違う人達と実際に顔を見て接することの重要性、言葉をこえるツールとしてのダンスの可能性も更に感じた日々でした。個人的にはダンスを人類学的、歴史的な視点でも、とらえ直したい、そういう作業をフィールドワークの形で公私関係なくやっていきたいと思っています。

最近では即興で踊る事に現代性を感じています。即興ダンスの活動ももっとしようと思いました。今回を経て自分の即興ダンスの認識も深まった気がします。今回、エルビィさんの振付けは、(まず身体に向き合う事は前提として)目から動く、手から動く、方向を決める等、いくつかのタスクを設定し、それに身を任せ、自分の中から自然に生まれる動きを捉え、できるだけ自我なく発展させる、といったいわゆる一般的な振り付けとは違うやり方だったのですが、そのどちらかといえば東洋的な視点が意外でしたし共感できました、またエルビィさんのその徹底した態度に学びました。

そういった、タスクを生きる上の例えば、何時に会社に行く、お金をもうける、モテる、とか日常の事に置き換えるならば(タスクのチョイス、限定の仕方が重要ではあるのですが)、それはそのまま、よりよく生きる方法論に、豊かな日常という人生の目的に、つながる気がします。全身で向き合う、限定の仕方、というポイントは、作品作り、即興ダンス、生きるということでも自分にとってこれからにつながる重要なキーワードです。自分は何をどんな人にどんなやり方で伝えたいのかという事を色々考えさせられるよい機会でした。

しかし、とにかく、ダンスを観たり踊ったりして面白いと思うところは、いろんな人間がいるなあ、人間って面白いなあ深いなあわからんなあと思わしてくれるところで、考えて考えて、生きて生きて、まあとにかく踊ろうよ、まあとにかく踊ってみるか、という、言葉をふっと超える瞬間、そこから始まっていく圧倒的に爽やかな瞬間です。これからフィンランドで、鳥取で、作品発表となります。今回のこういった機会への感謝と、この長期的プロジェクトの現代における重要性を身をもって感じています。良い作品にしたいです。

## □川口隆夫

ここ数年ずっとテキストや映像を組み合わせたいわゆるパフォーマンスと呼ばれる類いの作品を中心に制作してきた私にとって、純粋な身体の動きと向き合うことはひとつの大きな課題でした。生来せっかちな気質であり、すぐにストーリーや構成を追いかけてしまい、言葉で言えばまだストーリーになる前の、いや文や単語になる前の、それだけでは意味をなさない「音」、「息」といったものの、ダンスで言えば身体の重さ、緊張や弛緩、開き、伸び、重心の移動や向き、バランス…、そういったことは、後回しにしてきたように思います。

これまで主に自作自演を中心に活動し誰かの振付けで踊るということはあまり経験がなかったので、エルヴィさんの振付けで踊るという今回のプロジェクトはとてもありがたく貴重な機会でした。昨年9月のワークショップではシンプルなエクササイズを繰り返しながらじっくり体を開いていくという、まさにこれまでの私に欠けていたものを見つけることができたように感じました。そして今冬、シンプルなエクササイズを通じてまさに「音」や「息」に耳を澄ますような作業を続けた1ヶ月間は私にとってとても幸せな日々でした。両の足の裏の皮が何度も向けて往生しましたが、それと同じように私の身体やダンスに対する考え方も一皮も二皮も剥けたのではないのでしょうか。公演を観てくれた友人は以前の力む癖がなかったと言い、その直後にあった別の作品の公演を観てくれた別の友人には、数年前の公演に比べて動きがとてもクリアになった、そして脚力がついたと言われました。本当に多くの滋養をもらったのだのだなあと我ながら感動しました。

エルヴィさんとのこの作業は同時に他の4人のダンサーとの共同作業でもありました。いつもはひとり稽古してばかりなので、彼らと一緒に踊るのはことのほか楽しいことでもありました。自分の体の中に起きている変化が彼らの体にも目に見えて起こっていくのを目撃するのは新鮮な驚きでもあり、多くのことに気づかされました。

今後また自作自演の作業に戻るとき、きっとまたストーリーや構成に頭を悩ますのだらうと思いますが、その物語は「音」や「息」がひとつひとつ積み上がってできていくのだという、至極基本的なことを忘れないようにしようと思います。『KITE』は6月にはフィンランド、9月には鳥取の空に掲がる予定です。とてもとても楽しみです。



## ■「KITE」公演情報

---

空を飛んでいる風は、

軽さ 喜び 遊び心 静けさ 停止 予期せぬ瞬間 勇気 スピード 自由

そして、人生そのもの。

それは私を変えてくれる。

振付:エルヴィ・シレン

作曲・音響デザイン:アーケ・オッツサラ

照明デザイン:藤本隆行

出演:垣尾優/川口隆夫/玉邑浩二/岩淵多喜子/立石裕美

ステージ・マネージャー:尾崎聡

日程:3月2日(金) 19:30 3月3日(土)15:00 (開場は両日 30分前)

※両日とも終演後、アーティスト・トークあり。

会場:京都芸術センター KYOTO ART CENTER

〒604-8156 京都市中京区室町通蛸薬師下る山伏山町 546-2 TEL:075-213-1000

チケット:【前売】一般 2000 円/JCDN 会員・学生割引 1800 円 【当日】 2300 円

セット公演チケット[本公演+「踊りに行くぜ!!」Ⅱ vol.2 京都公演(3/10.11)]4000 円

### 「KITE」<PRESENTATION&SHOWING>途中経過発表 Work in Progress

日時:2012年2月15日(水) 開演:17:30

会場:BankART Studio NYK NYK ホール (横浜市中区海岸通 3-9 TEL045-663-2812)

料金:¥500(当日受付のみ)/TPAM パスで無料

問合せ:国際舞台芸術交流センター(PARC) 03-5724-4660 info@parc-jc.org

舞台芸術 AIR ミーティング@TPAM 参加プログラム <http://www.tpam.or.jp/>

(国際舞台芸術ミーティング in 横浜 2012 併設事業)

■ ■ JCDN 国際ダンス・イン・レジデンス・エクスチェンジ・プロジェクト ■ ■  
“日本-フィンランド ダンス レジデンス エクスチェンジ 共同製作 プログラム”

共同製作フィンランド・パートナー: ZODIAK<sup>®</sup>



平成 23 年度文化庁文化芸術の海外発信拠点形成事業

助成: 公益財団法人セゾン文化財団

共催: 京都芸術センター

翻訳・制作スタッフ: ケイトリン・コーカー

宣伝写真: 大橋翔 デザイン: 太田洋晃

作品制作撮影: 村山華子 映像編集: 飯名尚人

企画・主催: NPO 法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク(JCDN)

〒600-8092 京都市下京区神明町 241 オパス四条 503  
TEL075-361-4685 FAX075-361-6225  
jcdn@jcdn.org / <http://www.jcdn.org>



## ■ Artist Profile

---

### 振付 Choreographer

#### Ervi Siren エルヴィ・シレン

ダンスアーティスト、振付家、舞踊家、舞踊指導者であるErvi Sirén は1970年代よりフィンランドのコンテンポラリーダンスの発展に広く影響を与えてきた。70年代にはカンパニーDance Theatre Rolloのダンサー／振付家として活躍し、80年代はシアターアカデミーの講師を務めながら、ソロ作品や多くの振付作品を発表。1998年から2007年には舞踊学部の教授を務めた。Sirenの身体に刻まれた知識は、フィンランドの多くの舞踊家へ伝えられてきた。

70年代から5度、国立アーツカウンシルの助成を受けている。2000年Pro Finlandia medal、2001年States Prize for Dance授賞。60歳をむかえ、Sirenは再びダンスの分野でフリーランスの活動に戻った。彼女は、振付家として多様なキャラクターを持つ舞踊家と作品制作をのぞんでいる。

### 作曲・音響デザイン Composer /Sound Designer

#### Aake Otsala アーケ・オツサラ

ミュージシャン、作曲家、サウンド・デザイナー。フィンランドで著名な振付家 Alpo Aaltokoski・Arja Raatikainen・Ervi Sirén など多数と活動している。また、Otsala はフィンランドのポピュラー・ミュージック界で長い経歴を持ち、自身のプログレッシブ・ロックバンド Absoluuttinen Nollapiste など 20 枚以上のディスコ・グラフィールバムがある。ソロアルバム "Songs From a Closed Room" は、2010 年にリリースされた。

### 照明デザイン Lighting Designer

#### 藤本隆行 kinsei

ディレクター・照明デザインアーティスト。1987 年、ダムタイプに参加。そのパフォーマンス作品のほとんどで、照明並びにテクニカル・マネージメントを担当する。近年は、LED 照明デザインを特徴とする作品を制作、コラボレーションも多数。07 年には白井剛や川口隆夫等、9 名のアーティストと共に「true/本当のこと」を発表。現在、最新作「砂漠の老人/Node」と「SeeingRed/赤を見る」の制作を継続中。

## 出演 Dancer/Performer

### 岩淵多喜子 Takiko IWABUCHI

ラバンセンターで、コンテンポラリーダンスを学ぶ。ダンサーとしてエルヴェ・ロブ、テッド・スタッフアー等に参加後、1999年 Dance Theatre LUDENS 設立。以後、全作品の演出、振付を行う。代表作として「Be」、「Es」、「Distance」、「Against Newton」等。国内外 11ヶ国で上演、高い評価を得る。01年「Be」で横浜市文化財団賞及び若手振付家のための在日フランス大使館賞受賞。05年「Distance」で日本舞踊家批評家協会新人賞受賞。他、ソロ活動、海外の振付家との国際共同製作、東京国際ダンスワークショップなど多岐に渡る。

### 垣尾優 Masaru KAKIO

窮地をサバイブする場合と同じく、根底に歓びをもって踊ることを基調としている。ジャクソン・ポロックの絵画に衝撃を受け、大野一雄の写真を見てダンスを始める。95年よりモダンダンスを学び、00年から自身の活動を開始。野外でのドキュメントプロジェクトなどを行う。06～09年 contact Gonzo で活動。ダンサーとして山下残、Dance Theatre LUDENS、Ensemble Sonne 等の作品に参加。

### 川口隆夫 Takao KAWAGUCHI

パフォーマー。□1991年より吉福敦子らと ATA DANCE を立ち上げ、ダンスを始める。96年より「ダムタイプ」に参加。並行してソロパフォーマンス。03年以降は音楽とアートの領域をまたぐアーティストとのコラボレーションを、08年からは“自分について語る”をテーマに「a perfect life」シリーズを展開中。ジャンルに囚われず、常に新しい表現方法やテーマを模索するパフォーマンス作品を目指している。

### 立石裕美 Yumi TATEISHI

母(元宝塚歌劇団)の影響で幼少よりジャズダンスを始める。2001～07年クラシックバレエ、ジャズダンス、タップダンス等の舞台経験を積み、08年「PEACE」、09年「spiral」自身の振付・出演作品を発表。10年ドイツ、ベルリンへダンス留学。11年チェコ、プラハで開催された国際舞台美術展プラハカドリエンナーレに振付・出演作品で参加。

### 玉邑浩二 Koji TAMAMURA

2007年から自身のユニット“とりとら”の演出・脚本を行う。09年武藤容子に師事し、ダンスの研鑽を始める。11年9月千代田芸術祭 2011にて自身の振付・出演作品「雨」で伊藤千枝賞を受賞。“今ここにいる実感”を即興という形で表現している。

## ■ 「KITE」 制作日誌

---

2012.01.25 稽古はじまりました。

はじめまして。このプロジェクトに出演します玉邑浩二（タママラコウジ）です。

今日、はじめての稽古をしました。同じ出演者の方と会うのもオーディション以来で緊張しましたが、和やかな雰囲気になりました。稽古中、出演者一人一人の身体から出てくる動きを丁寧に見ているエルヴィさんが印象的でした。まだ初日なのでどんな作品になっていくのかわかりませんが、できるだけナチュラルな状態で臨みたいなーと思っています。

---

2012.01.26 稽古3日目

本日日誌担当 立石裕美（たていしゆみ）です。

稽古3日目に入り、稽古場はよい緊張感でとてもいい空気が広がっているように感じます。

川口さんの素敵なムーヴメントを

垣尾さんの素敵な「WALK」を

岩淵さんの素敵なテクニクを

玉邑さんの素敵な日本人らしさを目撃しました♪打たれました。

---

2012.01.28 4日目 1月28日 とろ火

川口隆夫、初投稿。昨日一昨日と腹の調子が悪くきつかったが、なんとか持ち直して今日4日め。極めてシンプルな課題(たとえば、足のつま先と手の指先の間をつなかりを意識して動く、とか、今日新しく出たのは、太もものいろんな面を意識して動く、など)で、かなりじっくり、わりと長い時間動き続ける。全員一緒にやったり一人ずつのときも。10分、20分とストップなしに長くなってくるとそりゃ太ももも張ってくる。それでもなんかおもしろい動きを見せてやる、とかもっと動かねば…などと気負う。自分の悪い癖で、気負いが出て力むと上半身がぐねぐねし出す。そうすると、もっとシンプルに、あるいは direction を明確に、と諫められる。この癖はいつになっても治らない。去年の夏の『ブラックアウト』もおなじことを考えていたのに。だから今回の Ervi との作業は自分にとってとても重要だと思うし、おもしろい。彼女が「Beautiful!」という瞬間がどのように見えているのかは踊っている僕らにはわからないけれど、じっくりとろ火でことごと煮詰め(られ)ていくのは、何というか…、気持ちがいい。

---

## 2012.01.31 「KITE」二週目

垣尾優です。「KITE」リハーサル二週目に入ってます。今日もじっくりじっくり、良い感じです。じっくりゆっくりが主ですが、今日も汗だく、最初はかなりの筋肉痛でした。しかし、エルビィはさすが教育者、遠くを観れる人。粘りと、あたたかさがあります。エルビィの出す課題をそれぞれが身体で変換し、ゆっくり動き出す、今日は目、視線から動く、動かされる等。「float」「easy」「spine」といった言葉を合いの手のようにエルビィ、更にそれに導かれ、もっと高く、あるいは深く、いつの間にか昼休憩。たかおさんが味噌汁とコーヒーを持ってきてくれる、こうじくんもピンクのお菓子を、ゆみさんは白いキットカットを。昼食後のリハへ。今のところいつもリハーサルの最後の方にはフロアに寝ころがって、肩や脚の付け根を自由して全身を統一するような、ゆっくりゆっくり、泳ぐような浮きつづけるようなワークをしますが、それも今日はなんやかんやで一時間半ほど延々と。淡々と。心地よさは異常、時間など無くなってしまえ。と思うが終わると大体いつも、もう僕はふらふらです。エルビィのじっくりとした進め方、内容が、今の自分には意義あることと思えます。そして毎日、当たり前前に踊る環境というのが、自分にとって本当にありがたいのは勿論ですが、こういうしっかり向き合う場、機会があるというのは、社会のなかでのダンスということでも作品作りにおいても、とても大事なことだと、また、つくづく思いました。とにかく、いい作品になればと思います。明日は自分もお菓子を持って行きます。

---

## 2012.02.06 稽古三週目 藤本さん、アーケさん到着

本日日記担当の立石です。今日はあいにくの雨で稽古場の朝はどんよりしてました。稽古はいつも同様、目をつぶって意識を集中、呼吸を使って感覚を大事に身体と向き合います。<<connection>>

「finger tips」「elbow」「shoulder」「chest」

ゆっくり丁寧に身体の声を聞きます。

1.2.3 1.2.3 2.3 3.1 人

場をみつつ 空気を読みつつ 5人は混ざりあいます。

<<eyes>>

目によって身体は動かされます。身体から勝手に出てきた指令によって、スタジオの隅々まで身体は動きまわります。

1.3.2 1.3.3.3.2 人 2人 1人 2人。。。

先週終わりから1人ずつ単独稽古も開始しています。

少しずつじわじわと進化しています。そして今日は照明デザインの藤本隆行さん到着です。

先週終わりに音響デザインのアーケ・オッツサラもフィンランドから到着しました。

アーケさん今日は『正座』してリハーサル見ていました(笑)。

---

## 2012.02.07 TPAMまであと1週間

こんばんわ。玉邑浩二です。

2月15日（水）に横浜で行われるTPAMまであと1週間くらいになりました。

TPAMでは出演者5人それぞれ短いソロをやるようで、後半はその稽古をやりました。たかおさんは明日ソロの稽古なので、4人だけのソロ稽古でした。

エルヴィさんがよく「みんな違う踊り方をしている。面白いよ。」と言うんですが、ソロの練習を見ていて改めて、ほんとに違う踊り方をしてるなーと感じました。

なんで違う踊りになるのか。とか

なんでたくさんの動きの中で似たような動きの種類を選ぶことで

「その人っぽさ」が出てくるのかな。

とかを帰ってからグダグダグダグダ考えています。

動きの選ぶ癖（パターン）はみんなあるけれど、それにひっぱられないで、なおかつ抱えて遊べたら楽しそうです。日々の稽古ではその動きの選ぶ癖（パターン）を認識させられている気がします。毎日、小さい自分を見せられるようです。多分、それは大きくなれるチャンスです。

最近稽古で、5人のセッションみたいなこともやります。ソロとは違う緊張感がありとても遣り甲斐があります。これからもっと濃厚になると思います。楽しみにしてください。

明日はみんな衣装を持ち寄り相談します。

写真は、アーケさんとキンセイさんとエルヴィさんの打ち合わせ風景。あと、今日ビデオ撮影のためにきて頂いた村山さんです。これから撮影に来てくれるそう。ありがとうございます。これからよろしくお願いします。

---

## 2012.02.14 明日15日は横浜バンクアートでの試演会です。

垣尾優です。明日は横浜バンクアートでプレゼンを兼ねた試演会です。

しかし関係ねえ、バレンタインも関係ねえ、まず今日もやることはやるぜとエルビィ。

稽古スタート。いつものプリエをじっくりと、私が勝手に雫プリエと呼んでいるエクササイズが始まる。脚は肩幅に開き、膝を緩め、立つ、呼吸、easy、両腕は大きく開きながら外側からゆっくり頭上まであがる、頂点で両手首がはらりと雫のように。落下の瞬間。

そのまま甲を合わせるような形で正中線を、目の前を、下に、地面に向かって、両手がゆっくり落ちて行く。指先が顔を通りすぎたあたりで、肘が肩より下がるあたりで、首の後ろあたりに手の重みが伝わり、それをきっかけに頭も自然に垂れてくる、そのまま、手も落ち続け頭も落ち続け背骨も順番に丸くなっていき、つながりが膝や脚の付け根を曲げ、そしていわゆるウンコ座りに。足の裏。そう足の裏、足の裏、足の裏足の裏。

そしてまた骨盤が上がりだし、膝を曲げる流れで上体も起き始め、立ち上がり両腕が開きだし頭上に、そしてまた雫が落ちる、繰返し繰返し。

2012年、今、今は構築より発見だよ、とエルヴィ、いや実際エルヴィから言葉で聞いた訳ではないが、とにかく、こういった毎日の繰返し、このじっくりさによって、日々の些細な変化を感知できるようになってくる。僅かな違いが、快感めいた喜び、豊かな日常とはこういうものか、豊穡さの発見がダンスの役割のひとつなのだ、とエルヴィ、いや実際やっぱり言葉ではそんなこと言っていないが、きっと、というかすでに身体をとおして、課題、演出をとおして、そう私は受け取りました。

しかしそんなことばかりも言ってもらえない、明日は大事な試演会だけ、さあ構成するぜとエルヴィ。了解です、混沌を構成するとはどういうことか、空洞そのものをぽっかりうかびあがらせるとはどういうことか、身体で示してやりましょう、昼飯なんかいらねえ、と私達ダンサー。コンポーザーのアーケが静かな笑みをたたえながら音をだす、私も同じく無音のために音をだしているのだ矛盾を作曲しているのだといったたずまい。照明家の藤本さんは光りに時間をも組み込む。組み合わせず。それって神じゃん、神様だよ。LED がプログラミングで日の光のように微細に変わる、雷のように閃光する。私達ダンサーは、ファンキーな魂と赤ん坊のような柔らかい足の裏でもって、雲のように踊っています。

---

2012.02.17 ここから。。。。

岩淵多喜子です。昨日パンカートで TPAM のプログラムの一環として KITE の途中経過の試演会を行いました。まだまだ製作途中ですが人前に出ることで見えてきた新たな課題もあり、公演まで残すところあと1週間強のリハ期間ですが、エルヴィさんの丁寧な体への向き方、それをそのまま舞台上に上げるという手法をきちんと理解して、体現出来るよう、集中して取り組みたいな、と思っっています。

自分の中に留めているリハ中に出たエルヴィさんからのキーワード

Water、Connection、Direction、Bone、Just to be、Taste every moment…

とても難しく1か月ではたどり着けないような課題ですが、いわゆる振りを与えられる「振付」の作業ではなく、動きの質感や体への意識からやれている今回のクリエーション、ダンサーとしてとても貴重な時間をもらっています。

体や思考の余計な贅肉、自意識を出来るだけそぎ落として。



## ■ 京都公演観客アンケート

---

【3月2日(金) 19:30開演】

- ◆ 5人で動いているときの空間の力が、流動的に形成されていく感じがすごく好き、音も良かった。照明が不思議な感じで良かった。
- ◆ 部分的でも分かりやすい振付があれば発想しやすいが、5人に絡み合う部分、緩急、が欲しかった。5人の個性の違いがあまり見えなかった。しかし、ゆったり美しくリラックスできた。逆に言うと、刺激部分がなく終わった感じがした。
- ◆ 動いているように動いているのが見えておもしろかった、気持ちよかった。5人がいっせいに動いている時は3回目くらいから、まるで自分もその中にいるような気になりました。無造作な動きの中に、時々、規律的な振りや一人ではなく複数の人でお互いが相関するような場面になった時、そういうものがダンスだと当たり前と思っていた事が、当たり前ではないということにハッとさせられました。その瞬間、世界が違ふように見えておもしろかったです。空間的なおもしろさもあった。音楽のアーケさんがどのように曲をつくったのか、興味があります。(20代 学生 女性)
- ◆ とてもシンプルな、無駄のない世界が魅力的でした。(30代 主婦)
- ◆ 音と動きだけの舞台は初めての経験。とても集中でき心地よい時間でした。(60代 主婦)
- ◆ トークを聞いて何を表現しようとしたのかわかりました。(60代 男性)
- ◆ 舞台作品として完成していないと思い、残念だった。照明、音楽に頼りきって身体としての空間構成が非常に弱い。個々のダンサーの動きと空気の流れや空間における打点が見えない。こんなワークショップをしていました、という程度。エルヴィさんがこの日本で何を感じ何をしていたのか、日本とフィンランドで何を生み出したいのか、よくわかりません。ヨーロッパのコンテンポラリーダンスの限界を感じる舞台でした。(40代 美術家)
- ◆ 音楽、照明、ダンスの関係が奥深く楽しめた。ダンサーの動きひとつひとつが繊細で足のつま先まで動きが表現されていて、ものすごく集中できとても引き込まれた。この動きをダンサーが見つけていくということがすごいと思った。“KITE”を通してダンサーがそれぞれのKITEを表現できる、自分の感じるKITEを見つけていく、それをなんとか感じ取れたと思った。言葉を使わないコミュニケーションをしているようで、とても楽しかった。(20代 女性)

### 【3月3日(土) 15:00開演】

- ◆ 音を感じて体を静動させ作品になるのに感動しました。普段の私の生活とは別世界のものです。明日への切り替えにもなりました。(50代 主婦)
- ◆ 流れの中の魚のごとく、動きの連続性が美しかった。(30代 教員 男性)
- ◆ 心地よい照明と音の中で、やわらかな動きを感じられました。立石さんの動きが良かったです。(20代 男性)
- ◆ 心が洗われる気持ちがありました。全然、嫌な感じがしないきれいな作品でした。(20代 会社員 女性)
- ◆ 新しいダンスを観たきがしました。(20代 会社員 女性)
- ◆ 新鮮なダンスだと感じました。アツという間の上演でした。また観たいです。(50代 女性)
- ◆ 身体の持つ可能性をたくさん見ることができた気がします。きっとどのシーンにも常にルールがあったと思うのですが、そのようなルールや動きの質が第一印象ですが、ある程度の時間見ていると有機的に見えたり、具体的な物質が思い浮かんだりして不思議な空間、時間でした。